

管理栄養士・栄養士の生涯学習内容と制度に関する研究 ～生涯学習内容の変遷と今後の課題～

大 原 栄 二*

Life-long Education System for Supervising Dietitians - Course content changes and future content -

Eiji Ohara *

Abstract

The life-long education system for supervising dietitians has aimed at improving their skills. This system was established in 1987 and has been amended a total of four times to date.

This research examines the changes in the course contents and analyzes them from a historical perspective, finding that they have become broader in nature.

In conclusion it is important to continue to develop the contents of life-long education in order to maintain balance. This principle can also be applied not only to dietetics, but also other fields.

キーワード

生涯学習、管理栄養士・栄養士、卒後教育

第 I 章 研究の概要

第 1 節 研究の目的と背景

管理栄養士・栄養士は国民の栄養改善や健康増進に深く関わっており、献立作成や栄養管理、衛生管理、栄養指導等の業務を行っている。最近では、管理栄養士・栄養士に対する社会のニーズは高まりつつある。この社会ニーズに対応するため、社団法人日本栄養士会（以下、日本栄養士会という。）では生涯学習制度を通じて既卒の管理栄養士・栄養士のスキルアップを目指している。

まず、生涯学習について触れておく必要がある。香川（2009：3）によれば、「生涯学習とは、自発的意思に基づいて自己の充実や職業能力の向上のために自ら学ぶ内容を選び取り、生涯にわたって行う学習である」と、定義している。しかし、生涯学習研修会オリ

* おおはら えいじ：大阪国際大学短期大学部講師（2011.11.9受理）

エンターション資料（日本栄養士会、2010）では、「会員が自らのスキル向上のために管理栄養士・栄養士に必要な知識や技術を身につけるための新カリキュラムに対応した学習制度である」と、定義しており、一般的な生涯学習と意味合いが違っている。すなわち、生涯学習とは、生涯にわたって行う学習であるにも関わらず5年間で60単位取得することとしており期限を設定しているのである。また、日本栄養士会の生涯学習制度は、5年サイクルの継続的な学習であり、専門性を持っているため本来ならば継続的専門教育と呼ぶことが多いが、日本栄養士会では、このことを生涯学習制度と定義しているため、本稿でもこの定義に従って述べることとする。

現在、この生涯学習制度の参加対象は、日本栄養士会会員であり、5年間で60単位を修得することが条件となっている。ただし、60単位のうち必須単位は7単位で、残りは選択単位と振替認定単位を合わせて53単位を取得し、修了となる仕組みである。ちなみに大原（2010）によると、2009年の生涯学習内容は、臨床栄養学、公衆栄養学、応用栄養学の科目が多い結果となっている。このデータ結果より、なぜこの3科目が多いのか疑問に思ったのである。また、生涯教育制度が始まったときからこのような現象がみられていたのかさらに疑問が生じたのである。そこで、生涯教育内容や生涯学習内容の変遷をたどることによって生涯学習内容がどのような変化を辿ってきたのかを実証できるのではないかと考えたのである。

本研究では、管理栄養士・栄養士の生涯学習内容と制度について、歴史的背景から生涯学習内容を分析した結果、時代背景や生涯学習制度の改正により、生涯学習内容が大きく変化することが分かったので報告する。

第2節 先行研究

管理栄養士・栄養士制度の研究に関しては、管理栄養士・栄養士の歴史、教育課程、定義などが主に行われ、主として鈴木（2008、2009）や藤沢（1999）の研究がある。これらの研究では、管理栄養士・栄養士制度などについては明らかにしているが、生涯学習関係については考察されていない。

次に、管理栄養士・栄養士の生涯学習に関しては、生涯学習の必要性、免許取得後の教育体系やシステム、生涯学習の概要についての研究が行われてきた。例えば、赤松ら（2004）と小松（2006、2009）の研究がある。これらの研究は、生涯学習の重要性やアンケート調査によって生涯学習に関する問題点や内容、今後実施したい生涯学習方法について明らかにしており、管理栄養士・栄養士の生涯学習に関する実態が把握できると言える。しかし、生涯学習制度や学習内容の課題についてはまだ十分に明らかにされていない。よって、生涯学習内容に関する先行研究はあまり行われていないのが現状である。

第3節 管理栄養士・栄養士の定義

藤沢（1999：32-50）によると、1925年に佐伯矩が1年制の栄養士養成学校を設立し栄養教育が始まり、1935年に国際連盟を通じて、「栄養士」を紹介し、日本で始めて「栄養士」の名称が使われ始めたのである。

また、管理栄養士の始まりは1962年の栄養士法一部改正からであり、栄養士の資質向上を図ることを目的として管理栄養士が創設されたのである。

現在の管理栄養士・栄養士の定義は2000年度の栄養士法一部改正を基に以下のように定めている。

栄養士とは、「都道府県知事の免許を受けて、栄養士の名称を用いて栄養の指導に従事する者をいう」。

管理栄養士とは、「厚生労働大臣の免許を受けて、管理栄養士の名称を用いて、傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導、個人の身体の状態、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の維持増進のための栄養の指導並びに特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体状況、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導等を行うことを業とする者をいう」と定義されている（栄養士法第1条及び第1条2、2000、日法律第38号）。

第Ⅱ章 管理栄養士・栄養士の生涯学習制度の変遷

第1節 生涯学習制度の経緯

1987年、日本栄養士会が生涯教育制度として出発し、その後1998年の「21世紀の管理栄養士等あり方検討会報告書」（厚生労働省：1998）を境にして生涯学習は急激な進歩をとげたのである。

管理栄養士・栄養士の生涯学習制度は、日本栄養士会会員が自ら希望する生涯学習研究会などを通じて管理栄養士・栄養士として必要な知識や技術を身につけて、スキルの向上を図ることを目的としている。

生涯学習は、1987年から現在までに4回の改正を行った。管理栄養士・栄養士の生涯学習を分類すると、1期（1987年～1996年）、2期（1997年～2003年）、3期（2004年～2008年）、4期（2009年以降）の4段階に分類することができる。次にこの4段階の改正内容について述べる。

第2節 1期（1987年～1996年）

福岡県栄養士会創設45周年記念誌（福岡県栄養士会、1993：201）によると、1987年6月、日本栄養士会第29回通常総会で生涯教育制度化の概要を承認し、生涯教育対象者を3種類（基礎研修コース、専門栄養士認定のための研修コース、専門資格更新のための研修コース）に分類し生涯教育をスタートさせることとなった。

基礎研修コースは1988年11月施行し、栄養の専門家として日常業務を遂行する上で必要な知識と技術を習得するコースである。日本栄養士会が主催で6日間試行的に実施したのである。生涯教育は、管理栄養士・栄養士が対象であり、受講には3つのルールが設定された。1つ目は、3年間かけて受講すること。2つ目は、1年間で取得しなければならない単位数は5単位以上、18単位以下であること。3つ目は、修了に必要な最小単位数は栄養士40単位、管理栄養士25単位履修することであり、すべての条件を修了すると修了証書

を交付する仕組みとなっている。

ちなみに、1992年度生涯学習研修会基礎研修コースの開催会場は24都道府県であった。

専門研修コース（5年間）は1993年より施行された。このコースは、日常業務の専門性を高めるために必要な知識と技術を習得しスペシャリストを養成する生涯学習であり、このコースは基礎研修コースを修了した管理栄養士が対象となる。それぞれの専門栄養士になるために必要な所定の単位を履修すると修了となる。

専門資格更新のための研修コースは、専門資格認定を更新するためのプログラムであり、高度な専門知識と管理職に必要な知識・技術を習得することを目的としている。生涯教育制度の流れを下図（図1）に示す。

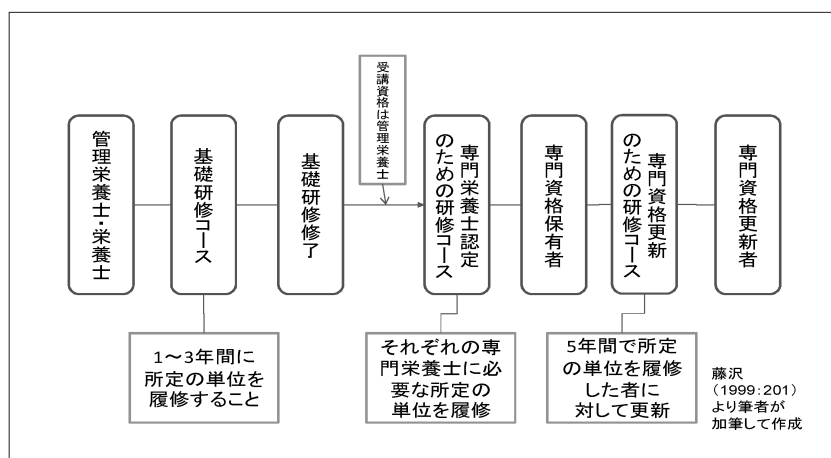


図1 生涯学習制度
(1987年～1996年)

第3節 2期（1997年～2003年）

藤沢（1999：199-201）によると、この時期は管理栄養士・栄養士の生涯学習の大きな変革期であった。具体的には、「生涯教育制度」から「生涯学習制度」に名称を変更し制度化されたのである。この改正は、1996年に改正され試行を経て1997年より実施された。そして、自主的な研修を単位として認めるとともに3年後には演習を実施するなど内容面の充実がみられた。生涯学習の種類としては、3年研修コースと5年サイクル研修コースを設けたのである。

3年研修コースは、栄養士として日常業務を遂行していくうえで必要な知識と技術の修得を図りながら、専門職としての学習姿勢を体得するための出発コースである。学習期間は3年であり、取得単位数は栄養士は40単位、管理栄養士は25単位であり、1年間に最低5単位以上取得することが修了の条件である。

5年サイクル研修コースは、管理栄養士としての専門性の確立、業務の向上のため、さらに管理者として必要な知識と技術の修得を図り、生涯にわたり専門学習を行うことに主眼をおいて実施されるものである。学習期間は5年であり、取得単位数は60単位で1年間

に最低5単位以上取得することが修了の条件である。この期間の生涯学習制度を図示すると図2となる。

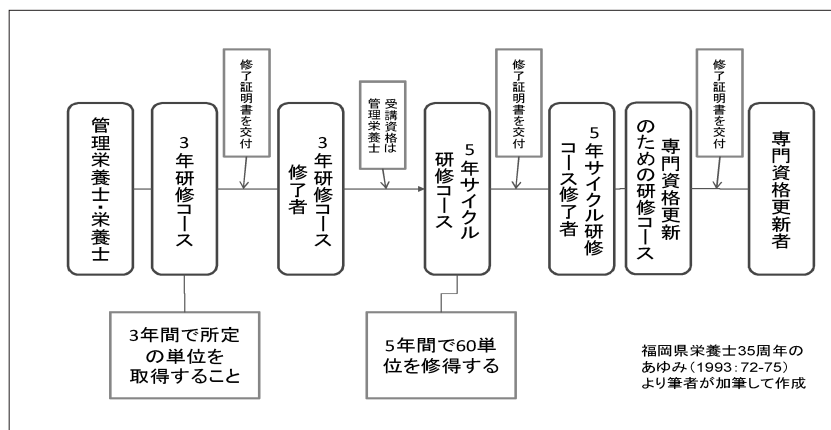


図2 生涯学習制度
(1997年～2003年)

第4節 3期 (2004年～2008年)

時代の流れとともに、管理栄養士・栄養士の業務が食品や調理といったモノから人を対象とした栄養管理へと変化したため、生涯学習制度についても見直しを行った。そして、2003年に改正され試行を経て2004年に改正された新生涯学習制度として新たに始まったのである。

生涯学習制度は、自ら希望する生涯学習研修会などを通じて知識や技術を身につけ、修了した管理栄養士は専門管理栄養士の受験資格や特定分野認定制度に参加できるなどの特典を設けている。また、管理栄養士養成新カリキュラムを取り入れたテーマとし、モノから人への考え方に対応できる学習内容を組み込むことを特徴としている。今までの生涯学習と改正後の生涯学習との違いは2点ある。1点目は、5年間で60単位(必須7単位を含む)を習得する。これによって3年研修コース、5年サイクル研修コースの分類分けは廃止された。2点目は、必須科目(7単位)を設けたことである。

また、生涯学習内容については、新しく必須単位と選択単位に分類されたのである。

必須単位については、必ず受講し7単位を修得しないと修了できない科目であり、以下の7科目で構成されている。

①他の職域の栄養士活動への理解を深める②医師・看護師などの関連職域への理解と連携③健康日本21とヘルスプロモーション④栄養管理業務と給食管理業務をどのように両立させるか⑤栄養アセスメントに基づいた栄養ケアプランの作成と実際⑥トピックス1⑦トピックス2で構成されている。トピックス1、2については各都道府県栄養士会が独自にテーマを設定し実施する内容で設定された。

選択単位については以前から実施している生涯学習研修会であり、管理栄養士養成施設

新カリキュラムに対応した内容を各都道府県栄養士会が検討を行い実施している研修である。

修了要件として生涯学習オリエンテーションを受講し、1年間に選択科目を5単位以上、必須科目を1単位以上取得し、5年間で60単位（必須科目7単位含む）を修得した場合、修了できるシステムに変更となった。

第5節 4期（2009年度以降）

日本栄養士会（日本栄養士会 HP）によると、2007年に生涯学習制度の見直しが行われ2009年度より全面的に実施されたのである。基本的には2003年以降の生涯学習制度のシステムの変更はないが若干細かい部分の見直しが行われた。

そして、2サイクル目以降の生涯学習受講生はトピックスの1つはレポート提出または学会・研修会等で発表を行うこととなった。具体的には各自が選択設定したテーマをもとにレポートを作成するか生涯学習研修会や各都道府県の栄養士改善学会等で講師や発表を行う方式である。以上のことを図示したものが図3である。

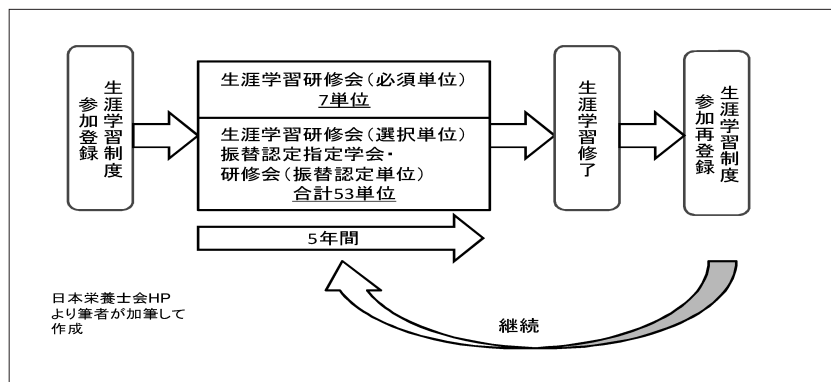


図3 生涯学習制度
(2004年～)

第三章 管理栄養士・栄養士の生涯学習内容の変遷

第1節 分析方法

日本の生涯学習内容を歴史的に整理し、分析するとともに課題点を抽出し考察する。

日本の生涯学習内容の歴史的調査については、栄養日本第1巻から54巻（1992～2010）に記載されている生涯教育内容・生涯学習内容データを調査対象とした。

分析方法は、改正を行った年度付近を基準として、1期（1992年、1996年）、2期（2002年）、3期（2004年）、4期（2009年、2010年）の6箇所を抽出することとした。そして、その年度の各項目の生涯学習内容回数を調査し、生涯学習内容の総合計で割りパーセンテージを算出し各項目の割合を年次変化で分析する。なお、生涯学習内容の分類については管理栄養士国家試験出題基準大項目9項目¹⁾とオリエンテーション、その他の11項目とする。

第2節 分析結果

図4は、生涯学習内容科目が増加している年次推移を示している。図4から臨床栄養学、応用栄養学、公衆栄養学、給食経営管理論が1992年と現在を比較すると、増加している傾向が見られた。

年次傾向を分析した結果、1996年から臨床栄養学、応用栄養学などは徐々に増加していることが判明した。このことより、1996年と2003年の改正が要因の1つとして考えられる。

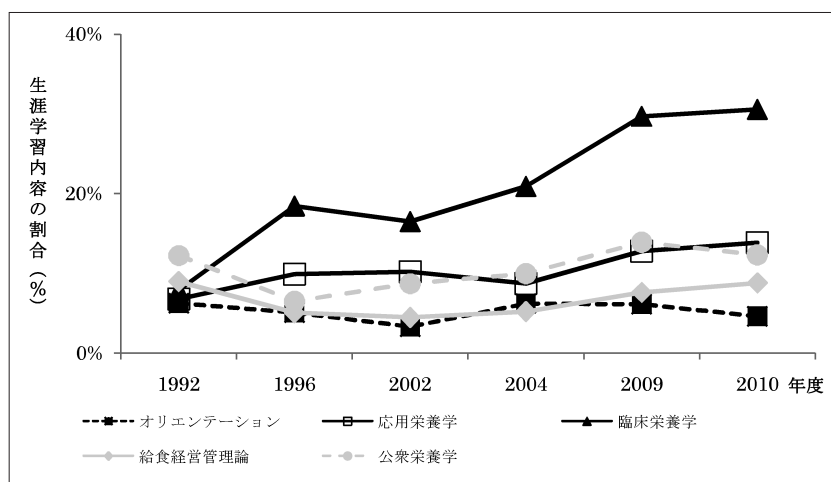


図4 生涯学習内容の年次変化 (増加している科目)
(都道府県栄養士会 HP、栄養日本の資料等より筆者が作成)

図5は、生涯学習内容科目が減少増加している年次推移を示している。図5から食べ物と健康と人体の構造と機能及び疾病の成り立ちが1992年と現在を比較すると減少している傾向が見られた。また、図5より社会・環境と健康、基礎栄養学、栄養教育論、その他について減少傾向が明らかになった。年次傾向を分析した結果、食べ物と健康やその他の科目は1996年から徐々に減少していることが判明した。このことにより1996年と2003年の改正が大きな要因の1つとして考えられる。

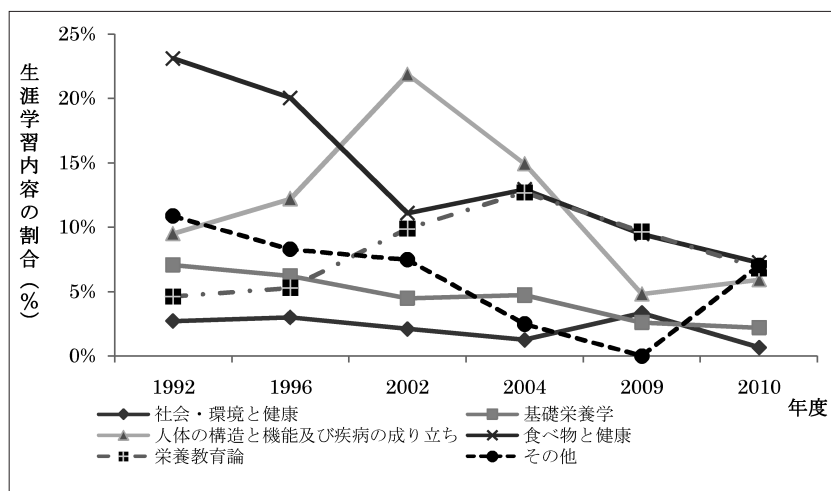


図5 生涯学習内容の年次変化 (減少している科目)
(都道府県栄養士会 HP、栄養日本の資料等より筆者が作成)

第IV章 管理栄養士・栄養士の生涯学習はどうあるべきか

分析結果から、どの年代においても生涯学習内容にバラツキがあり、どの科目も均等に実施されていないことが明らかになった。したがって、年次変化の結果より、1期の生涯教育内容から現在までの生涯学習内容のすべてにおいて均等な回数で実施された年度はなくすべての年度で回数にバラツキがあることが分析結果より明らかになった。

また、年次傾向を見ると1992年は食べ物と健康、公衆栄養学、人体の構造と機能及び疾病の成り立ち、その他の科目の割合が多く、臨床栄養学、応用栄養学、給食経営管理論は少ない割合となっている。逆に現在では、臨床栄養学、応用栄養学・給食経営管理論・公衆栄養学の生涯学習内容は増加しており、食べ物と健康、社会・環境と健康、基礎栄養学、人体の構造と機能及び疾病の成り立ち、栄養教育論、その他の生涯学習内容は減少している傾向が見られた。このことから考えられることは、1992年に多かった科目が2010年では減少しており、2010年に少なかった科目は1992年では割合が高い結果となっており、この約20年間で生涯学習内容に逆転現象が見られたことが推測される。この原因を考察すると、分析結果から2002年～2004年で大きく変化しており、2003年の生涯学習制度の改正によって生涯学習内容も検討され内容が大きく変化したことがこのような逆転現象がおきた1つの要因ではないかと考えられる。

特に1996年～2002年、2002年～2009年の間で生涯学習内容の割合が大きく変化している。なぜこのような変化が見られたのかこの要因について考察する。

まず、1996年～2002年の変化は1996年に改正されたことによって内容面が充実し、専門職としての学習体制を体得する3年研修コース、管理栄養士としての専門性の確立を図るための5サイクル研修コースが設立され、専門性を図るため、人体の構造と機能及び疾病の成り立ちの分野である疾病関係の内容が多くなったためと考えられる。よって、食べ物

と健康の科目を減少させ、人体の構造と機能及び疾病の成り立ちの科目を増加させたのではないかと推測される。

次に、2002年から2009年の変化については、2003年度の生涯学習制度の改正によるものが大きいと考えられる。この改正により、人を対象とした栄養管理の科目（臨床栄養学・応用栄養学・公衆栄養学）が増加したと推測される。すなわち、管理栄養士・栄養士の業務が食品・調理関係のモノから人を対象とした栄養管理へと変化したのである。よって、生涯学習内容についても見直しが必要となり、選択科目が「当分の間、管理栄養士養成施設新カリキュラムに対応した栄養士活動に重要と考えられる項目を含む」（日本栄養士会 HP）と改正したのである。よって、これを機に人を対象とした考え方へと移行し、臨床栄養学系の生涯学習内容が増加したこと、病院関係で働いている管理栄養士・栄養士の人数が多いことが考えられる。以上の要因によって、これらの科目が増加し、生涯学習内容に偏りがみられた1つの要因として考えられる。

そして、その他の科目²⁾についても大きな変化が見られる。分析結果より、2002年度を境に減少し2009年度には全く実施されていない結果となっている。この結果は、人を対象とした考え方へと移行しその科目が増加したため、その他の分野が徐々に減少したのではないかと推測される。しかし、2010年には増加傾向している。最近では、管理栄養士・栄養士の倫理やパソコン講座、論文やレポートの書き方や統計学、文献調査など、栄養士・管理栄養士の専門分野外の学習内容が見直され増加したのではないかと考えられる。

以上のことより、2003年の生涯学習制度の改正によって、人を対象とした栄養管理の科目（臨床栄養学・応用栄養学・公衆栄養学）が増加したことが分析結果から明らかとなった。

第V章 今後の展望

管理栄養士・栄養士の生涯学習内容の課題は前章で述べたように生涯学習内容の偏りである。

そこで考えなければならないのが、生涯学習の選択科目についてである。なぜならば、選択単位の定義として日本栄養士会は、「日本栄養士会および各都道府県栄養士会において企画・運営する研修会であり、当面の間、管理栄養士養成施設新カリキュラムに対応した栄養士活動に重要と考えられる項目を含むこととする。」（日本栄養士会 HP）と、定義していることからバランスのよい生涯学習内容の充実を図るべきであると考えられる。特に、選択科目については科目のバランスと充実を提案したい。すなわち、人を対象とした栄養管理の科目ばかりでなく他の科目や栄養学以外の科目も均等に回数を実施するべきであると考えるのである。例えば、栄養学の専門科目だけではなく、栄養学以外の科目を取り入れ、オールマイティなバランスのとれた生涯学習内容を築いていくことが重要であると考えられる。

最後に、管理栄養士・栄養士のカリキュラムは日々変化をしている。各養成施設ではコアカリキュラムの検討や改定が行われており、現在の学生は対応できている。しかし、改訂前に取得した既卒の管理栄養士・栄養士はこの現状に困惑している部分もある。今後は、人を対象とした分野も重要ではあるが、他科目と栄養学以外の科目がバランスよく学習で

き、既卒の管理栄養士・栄養士が学びたいと思う生涯学習内容を検討していただくことを期待している。

注

- 1) 管理栄養士国家試験出題基準大項目とは、社会・環境と健康、人体の構造と機能及び疾病の成り立ち、食べ物と健康、基礎栄養学、応用栄養学、栄養教育論、臨床栄養学、公衆栄養学、給食経営管理論9項目である。
- 2) その他の科目とは、文章の書き方、統計処理、パソコン講座、職業論理などのことをさす。

引用(参考)文献

- 赤松利恵、小切間美保、田中浩子、仲佐輝子、『管理栄養士等の生涯学習に関する実態調査－母校における生涯学習のあり方についての検討』同志社女子大学生生活科学 38、19-26、2004。
- 栄養士法
- 藤沢良知、『日本の栄養士教育・栄養改善活動～過去・現在、そして未来に向けて～』第一出版、1999。
- 福岡県栄養士会、『福岡県栄養士会創立45周年記念誌 45年のあゆみ』福岡県栄養士会、1993。
- 池本真二、『臨池実習マニュアルの検討』栄養日本、53(3)：26-8、2010。
- 香川正浩、『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書店、2009。
- 管理栄養士国家試験出題基準改訂検討会、『管理栄養士国家試験出題基準改定検討会報告書』厚生労働省、2002。
- 小松龍史、『日本栄養士会の関わり方』栄養日本、46(8)：11-32003。
- 小松龍史、『管理栄養士・栄養士の卒後教育』保健の科学48(2)：116-21、2006。
- 小松龍史、『卒後教育の重要性とその推進』社団法人設立50周年記念誌：P10-1、2009。
- 小松龍史、『卒後教育の重要性とその推進』法人設立50周年シンポジウム PPT 資料、2009。
- 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室、『管理栄養士・栄養士養成施設カリキュラム等に関する検討会報告書について』厚生労働省、2001。(http://www.jil.go.jp/kisya/kenkou/20010205_02_ke/20010205_02_ke.html、2010. 3. 1)。
- 厚生労働省、『21世紀の管理栄養士等あり方検討会報告書』、1998 (http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1006/h0608-1.html、2010. 3. 31)。
- 厚生労働省 HP。
- 社団法人日本栄養士会栄養士制度検討委員会、『栄養士制度改正に向けた施策の基本的考え方』栄養日本、50(9)、2007。
- 社団法人日本栄養士会、『管理栄養士・栄養士への道2008年度版』日本栄養士会、2008。
- 社団法人日本栄養士会、『社団法人設立50周年記念誌』日本栄養士会、2009a。
- 社団法人日本栄養士会、『平成21年度版栄養士必携』日本栄養士会、2009b。
- 社団法人日本栄養士会、『生涯学習オリエンテーション』平成22年度生涯学習研修会 PPT 資料、2010。
- 社団法人日本栄養士会、栄養日本1(1)-54(10)。
- 社団法人日本栄養士会 HP (http://www.dietitian.or.jp/index.html、2010. 6. 30)。
- 社団法人全国栄養士養成施設協会 HP、(http://www.eiyo.or.jp/、2010. 6. 30)。
- 社団法人全国栄養士養成施設協会、『第52回通常総会資料』全栄協月報、(596)：72、2010。
- 大原栄二、『管理栄養士・栄養士の生涯学習の課題と展望 ～制度と学習内容の観点から～』桜美林大学大学院、2010。
- 鈴木久乃、『日本栄養士会が目指す管理栄養士像』栄養日本、46(8)：3-4、2003a。
- 鈴木久乃、『日本栄養士会が目指す管理栄養士の給食経営管理の資質』栄養日本、46(8)：9-10、2003b。
- 鈴木道子、『日本における栄養士・管理栄養士制度と養成システムの変遷』東北大学大学院教育学研

管理栄養士・栄養士の生涯学習内容と制度に関する研究～生涯学習内容の変遷と今後の課題～

究科研究年報57(1)：445-57、2008。

鈴木道子、「管理栄養士－養成システムの二重構造－」橋本鉦市編著『専門職養成の日本的構造』
玉川大学出版部、165-83、2009。

